

選択の原理の問題とハイデガーの歴史性概念

若見理江（就実大学）

はじめに

ハイデガーは、歴史学において何が対象となるかという「選択」は「現存在の歴史性の事実に実存的選択」（SZ, 395）の内ですでに行われていると考えた。こうしたハイデガーの立場に関して、渡邊二郎は『歴史の哲学』で三木清が『歴史哲学』で提起している歴史叙述の問題を出発点として、ヴィンデルバントやリッカートにおける選択の原理の問題を取り上げつつ、「ニーチェやハイデガーの実存的歴史観に至ってようやく解決を見たと言ってよい」¹と結論づけている。渡邊は、歴史認識の根本に潜む「循環」の問題を視野に入れている点でハイデガーの哲学に選択の原理に関する「解決」を見出すのである。もっとも、ハイデガーの立場は、渡邊も認めているように、「選択」の根源を超越的歴史観（ヘーゲル、マルクス）や内在的歴史観（ディルタイ、ヴィンデルバント、リッカート、ヴェーバー）に代わって、歴史家の「実存」のうちに移し変えただけといえるかもしれない。しかし、ハイデガーの哲学ほど、歴史学という学問にそなわる性格を徹底して考えたものはないといえるのではないだろうか。

池上俊一は『歴史学の作法』で、歴史研究者は主観性に彩られた歴史をあるべき客観的な歴史から区別して、後者を実現しようとしてきたことを指摘する。近年におけるそうした言明の代表が遅塚忠躬の『史学概論』であり、遅塚は主観的解釈から独立した客観的事実の存在を認めることの必要性を説いた²。これに対し、池上は「歴史的存在である人間の主観性を通してしか、客観性も存立しえない」³という点に歴史学の特徴を見出し、さらにリッカートの『歴史哲学序説』を参照して、「ある出来事が重要かどうか価値判断し、その意味形象を叙述に取り入れるべきか否かを決めるのは、心的存在として歴史家自身がそれまでの人生における生活体験を通じて手に入れた問題意識あるいは生活意識である、というところが、学問としての歴史学の特異性であろう」⁴と述べている。本発表は、こうした歴史学の動向に対し、ハイデガー哲学の立場から「歴史学の特異性」について補足する視点を提供することを目的としている。

ハイデガーからの引用は下記の略号を用いた。全集版は巻号と頁数を記している。

SZ: Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Tübingen: Max Niemeyer, 17. Aufl., 1993.

GA: Gesamtausgabe, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann

引用文献について、翻訳があるものに関してはその訳文にほぼ従っているが、適宜変更している。

¹ 渡邊二郎『歴史の哲学：現代の思想的状況』講談社学術文庫、1999年、348頁。

² 遅塚忠躬『史学概論』東京大学出版会、2010年、119頁。

³ 池上俊一『歴史学の作法』東京大学出版会、2022年、19頁。

⁴ 池上『歴史学の作法』20頁。

1. 選択の原理——マイヤー・リッカート・ディルタイ

ハイデガーは「歴史科学における時間概念」(1915年)で、自然科学の時間概念を概観した後、歴史科学の補助学としての歴史年代学に注目し、歴史科学の時間概念を明らかにしようとする際に突き当たる困難を指摘している。その困難とは、歴史科学の目標と対象に関して、歴史学者たちの間でまったく一致が見られないというものであり、ハイデガーはこの問題を考える足がかりとして、まず歴史家エドゥアルト・マイヤーの歴史規定を取り上げる。マイヤーは「歴史の理論と方法」で、諸々の出来事のなかで何が歴史学的であるかという問いに対し、「歴史学的なものとは影響あるもの(wirksam)もしくは影響のあったものである」⁵と答えた。しかし、影響を及ぼすものに限ったとしても、個々の出来事の数には相変わらず無数である。影響を及ぼした無数の出来事のもとで歴史家が行なっている選択はいったい何にもとづくのか。この問いに対してマイヤーは解答を与えることができるのは「現在／現代(Gegenwart)」⁶だけであると答え、次のように補足している。「選択は、現在が何らかの影響(Wirkung)や発展の帰結に対してもつ歴史学的関心にもとづいている」⁷(GA1, 427)。ハイデガーはこのマイヤーの補足について「正しく述べている」と評価しながらも、「しかし」と続け、「関心」というものは、つねにある一つの観点から規定されていなければならない、所与の充溢のなかから歴史学的なものを選択することは「価値関係」にもとづいていることを指摘する。

この「価値関係」は、リッカートが『自然科学の概念形成の諸限界』で示した歴史学の概念形成のための概念である。ハイデガーは、マイヤーとリッカートの関係について立ち入って述べていないが、マイヤーは「歴史の理論と方法」で歴史学的関心が「現在」の形態に左右されることを指摘した後、リッカートの例を出して説明している⁸。リッカートによれば、フリードリヒ・ヴィルヘルム4世がドイツ皇帝の冠を拒否したことは一つの歴史学的事件であるのに対して、彼の上衣をどの仕立屋が作ったかは、どんなに詳しく聞き知っているに

⁵ Eduard Meyer, "Zur Theorie und Methodik der Geschichte", in *Kleine Schriften zur Geschichtstheorie und zur wirtschaftlichen und politischen Geschichte des Altertums*, Halle: Max Niemeyer, 1910, S. 43. エドワルト・マイヤー／マックス・ウェーバー『歴史は科学か』盛岡弘通訳、みすず書房、1965年、51頁。

⁶ これに該当する箇所では、三木清は『歴史哲学』で「現代」という訳語を用いている（「ここでもまた唯現代のみが答を与へ得る」『三木清全集』第6巻「歴史哲学 社会科学概論」、岩波書店、1967年、14頁）。これに対し、マイヤーを引用して「歴史家の現代は如何なる歴史叙述からも排除され得ない一の契機である」といった場合は、むしろ「現在」のことでなければならないとして、「現代」と「現在」を区別している（『三木清全集』第6巻、19頁）。Meyer, "Zur Theorie und Methodik der Geschichte", S. 44, 54. マイヤー／ヴェーバー『歴史は科学か』52, 63頁。

⁷ Meyer, "Zur Theorie und Methodik der Geschichte", S. 44. マイヤー／ヴェーバー『歴史は科学か』52頁。

⁸ Meyer, "Zur Theorie und Methodik der Geschichte", S. 44-45. マイヤー／ヴェーバー『歴史は科学か』52-53頁。

しても、まったくどうでもよい事柄である⁹。これに対して、マイヤーは、政治史にとって仕立屋は歴史学的に重要ではないものかもしれないが、流行や仕立業、その値段など、これに類するものの歴史において、一つの歴史学的関心を向けることがあるという。マイヤーによれば、どの仕立屋が作ったかということも関心が向けられることによって重要なものとなりうるものであり、関心が呼び起こされるのは、歴史学の対象となる個人や民族や国家、文化が今もなお影響を及ぼしているからである。

しかしまた、リッカートは『自然科学と文化科学』において、マイヤーの以上の見解に対して反論を行ない、マイヤーの選択の原理としての歴史学的影響性の曖昧さを指摘した¹⁰。リッカートにとって、歴史は「一回限りの個性的な経過」であり、「文化」の概念は、歴史学的概念形成に対して、現実のなかから本質的なものを選択するための原理を提供する。無数の出来事のなかで何が重要であり有意義であるか、何が重要でなく無意義であるかは、「文化」に含まれている「価値関係」にもとづいて決定される。「歴史学的に影響がある」のは、歴史学的に有意義な影響を及ぼすもの、つまり私たちが「理解的意味」を結びつけるものだけであり、マイヤーの批判は選択にあたって価値関係が必要であることをむしろ確認するものである。

ハイデガーは、マイヤーに対して立場を明らかにしていないものの、歴史学的影響性という観点を認めつつ、リッカートに倣って価値関係の必要性を主張し、両者の選択の原理を統合する形で「歴史科学の目標」を「人間的生の客観態の影響 (Wirkung) 連関および発展連関を、文化価値への関係によって理解可能なその客観態の唯一固有性および一回性において叙述すること」(GA1, 427) と明確化している。しかしこの規定には「生の客観態 (Objektivierung)」という、明らかにディルタイを思わせる用語が使われている。ディルタイの名前は「歴史科学における時間概念」では一度も言及されていないが、「生の客観態」という用語は数回使われており、マイヤーの「影響あるもの」という曖昧な歴史規定がディルタイによって補われていることが見てとれる。

ディルタイもまた「精神科学における歴史的世界の構成の続編の構想」でマイヤーに言及し、何を意義があるものと見なすのかという基準が必要であると述べていた。「もし私が、作用連関 (Wirkungszusammenhang) のなかでの位置そのものをエドゥアルト・マイヤーのように考え、したがってまた現在を物差しにしてそれを見積もるとすると、私はまず、この現在に関して、現在のなかで何を意義ありとするのかを規定するある基準をもたねばならないであろう。さもなければ、現在の状況の無限の連なりを引き起こしたものすべてには意義があるということになるからである」¹¹。ディルタイも意義を見出す視点の重要性を主張

⁹ Heinrich Rickert, *Sämtliche Werke, Textkritische Ausgabe, Teilband3/1: Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung: Eine logische Einleitung in die historischen Wissenschaften (1922)*, Rainer A. Brast (Herg.), Berlin/Boston: De Gruyter, 2023, S. 301.

¹⁰ Heinrich Rickert, *Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft*, 6. und 7., durchgesehene und ergänzte Auflage, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1926, S.89-90, 94. リッケルト『文化科学と自然科学』佐竹哲雄、豊川昇訳、岩波文庫、1939年、154, 160頁。

¹¹ Wilhelm Dilthey, *Gesammelte Schriften VII: Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den*

しているが、リッカートが選択の原理を認識の側に見出したのに対し、デイルタイは対象の側に見出している。「歴史家は、出来事のつながりのなかのある一点あらゆる方向に向かって果てしなく追求していくわけではない。むしろ歴史家の主題となっているある対象の統一性のなかに、まさにこの対象の把握という課題の内で与えられた選択の原理がある。というのは、歴史学的対象を論じるのに、広範な具体的作用連関から取り扱うべき対象を選別しなければならないだけでなく、同時に対象自体が選択の原理を包含しているからである」¹²。「作用連関」は、心的生の構造に従って価値を産出し、目的を実現する連関であり、まず個人の内に、そして個人の協同によって成り立つ共同体や文化組織の内に見出される¹³。個人、共同体、文化組織はそれぞれ価値を設定したり目的を実現したりすることによって自分自身の内に中心をもち¹⁴、さらに各々の作用連関は一つの全体へと結びつけられている。作用連関が収束して、言語や法、制度など多様な分岐した秩序を内に含んだ形態が「生の客観態」である。デイルタイにとっては、対象自体に選択の原理が包含されており、歴史家は生の客観態を成立させた作用連関のなかから取り扱うべき対象を選択し結合しているのである。

ハイデガーは、デイルタイの概念を用いて、もう一つの特徴である「歴史科学の対象」について次のように説明している。「歴史学的過去はつねに人間の生の客観態が別様であるということであり、私たち自身がそのように生きていて、そのようなものを創造しているかぎり、過去を理解する可能性が最初から与えられている」(GA1, 427)。私たちが生きている現在においてもつねに「生の客観態」が行われており、過去とのつながりが見出される。しかし、歴史家は過去を叙述しようとするとき、叙述の対象を自分の前にもたなければならないが、歴史学の対象はつねに過ぎ去ってしまっており、もはや現実には存在していない。歴史家と対象との間には時間の隔りがある。ハイデガーは、歴史家が時間の裂け目を超えて現在から過去への「通路 (Zugang)」(GA1, 428) を手に入れるということに時間そのものが働いていることを指摘し、時間の機能を明らかにするために歴史科学の方法論に注目するのである。

まず、歴史科学の第一の課題は、叙述されるべき出来事の実在性を確保しなければならないということである。ハイデガーはドロイゼンを引用して「史料 (源泉) の吟味」の必要性を取り上げる。「史料が〔…〕歴史学的現実性への学的通路を可能にする。史料からこの現実性がはじめて構築される」(GA1, 429)。このことが可能なのは、史料が価値の点で史料として保証されている場合であり、その確証は批判によって行われる。史料の価値は、立証されるべき事実から時間的にどれだけ隔たっているかにかかっており、成立時間 (時代) が確定されていることが重要である。そして第二の課題は、個々の確定されている諸々の事実の連関を明らかにすることであり、諸史料の内実を正しく解釈することである。これら二つ

Geisteswissenschaften, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 8. Aufl., 1992, S. 289. 『デイルタイ全集』第4巻「世界観と歴史理論」長井和雄、竹田純郎、西谷敬 [編集/校閲]、法政大学出版局、2010年、326頁。

¹² Dilthey, *Gesammelte Schriften* VII, S.164-165. 『デイルタイ全集』第4巻、180頁。

¹³ Dilthey, *Gesammelte Schriften* VII, S. 153. 『デイルタイ全集』第4巻、168頁

¹⁴ Dilthey, *Gesammelte Schriften* VII, S. 138, 154. 『デイルタイ全集』第4巻、151, 169頁。

の課題から、ハイデガーはデイルタイの「生の客観態」や「結晶」というジメル的な用語を用いて「歴史学的時間概念の質的なものとは、歴史の内に与えられた生の客観態の凝固——結晶——を意味するものにほかならない」（GA1, 431）と結論づける。

歴史科学において問題となる年代や期間といった数は、歴史家がその内に有意義なものを顧慮することによってはじめて意味と価値をもつ。たとえば、マッケンゼン軍が、カルパチア山脈からロシア・ポーランド要塞方陣の前まで軍を進めるのに「どれだけ」時間を要したかということにおいて「数」が問われている。しかし、「12週間」という量的規定が歴史家にとってそれ自体で価値と意味をもっているのではなく、同盟軍諸部隊の突進力や全線の目標の確固不確かさや、ロシア軍の抵抗がその量的規定から判断されるというかぎりにおいて価値と意味をもつのである（GA1, 432）。ハイデガーによれば、歴史年代学が歴史学的時間概念の理論にとって意義があるのは「時間を数える開始」という観点であり、時間を算定することの内に「価値関係」が働いている。価値を関係づける主観の働きによって生は客観化され、その内に質的なまとまりをもった歴史学的な時間概念があらわになっているのである。

2. 価値関係における循環

「歴史科学における時間概念」では、歴史科学の目標と対象を明らかにするにあたって、マイヤー／デイルタイ的な影響（作用）連関を考慮しつつも、リッカートの価値関係が重視されていた。しかし1919年戦時緊急学期講義「哲学の理念と世界観問題」では、ヴィンデルバントやリッカートの価値哲学に見られる「批判的—目的論的方法」の「循環性」を確認しつつ、その難点を視野に入れた「根本学としての哲学」を構想することが試みられている。

ハイデガーは、目的論的方法を質料提示と理想付与という二つの側面から説明する。価値哲学にとって、心理学は経験学であり、哲学は心理学から思考、意欲、感情という心理的機能を採用するが、それを手がかりにして目指すのは規範的領域である。目的論的方法が実行される際に、体験事象の連関としての質料がまず与えられており、質料を手にしつつ、同時に思考が目指すべき目的（普遍妥当性）にも眼差しが向けられることになる。つまり、思考の理想の方をみやりつつ、与えられた質料のうちで理想実現の条件であるような要素を規定することが行われている（GA56/57, 42-43）。このとき、理想の側からは「あるものにとっての規範」であるといった形で、そして質料の側からは「規範のもとに」「規範づけられた」「ある規範に関わりうる」といった形で性格づけられているのである（GA56/57, 55）。以上のような循環関係は、歴史学的概念形成としての価値関係にも見られる。1919年夏学期講義「現象学と超越論的価値哲学」で、ハイデガーはリッカートに即して次のように説明している。

実在的なものは一つの連続体であるが、実在のいかなる断片も他の断片と異なっている。つまり、実在的なものは非同質的な連続体である。こうした恒常性と非同質性との混在は実在に「非合理的なもの」という刻印を与える。概念化が成立するのは連続体が同質である場合であり、異質なものは連続体が一つの分離体に変容されるかぎりにおいて把握可能となる。実在は概念によって変形されるのであるが、変形が恣意的なものとならないためには、

実在のなかで何が本質的なものとして概念に吸収され、何が非本質的なものとして排除されるのかという視点が必要である。自然科学と歴史学とでは概念形成の仕方が異なり、自然科学が「一般化」を行うのに対し、歴史学は実在を「個別化」する。では、歴史学が一回的なこと、個別的なことを叙述するものであるとすれば、歴史学はいかに学問として可能になるのか。価値をともなう対象や事象は「文化的客体」と呼ばれる。個別的なものは無限に多様であるが、歴史家が叙述の対象にするのは「文化価値を具現しているか、あるいは文化価値と関わっている」ことだけである。文化の概念が歴史学的に本質的なことを歴史学的に非本質的なことから選別する原理を与える。価値関係は、事実確定の領域にとどまって価値に関わらせる理論的な手続きであり、賞賛や叱責という仕方では評価する実践的な価値評価から区別されるのである（GA56/57, 171-174）。

ハイデガーは、以上のような方法論的な研究が概念と実在という認識論的な問題とつながっており、学問の客観性の基礎づけということにおいて普遍的な価値という問題が関わっていることを指摘している（GA56/57, 175）。この問題は一つ前の「哲学の理念と世界観問題」で主題化されていたことであり、ハイデガーがそこで目指したのは、認識論的なものに根づいた循環を止揚する哲学の方法を考えることであった。ハイデガーはリッカートの概念形成の問題にこれ以上立ち入って言及していないため、リッカートの価値哲学に循環を見出すオックスの指摘を参考にしたい。オックスは、リッカートの価値関係論は個性的ないし歴史学的概念形成の問題に対するリッカートの解答であるとして、この学説を四つのテーゼから説明している¹⁵。

第一テーゼ：歴史研究の対象となる歴史学的主体は、諸価値に拘束されていなければならない。また、歴史研究の「歴史学的中枢」は、この諸価値に対して立場を明らかにしなければならない。第二テーゼ：諸価値は個人的ないし私的な性質のものであってはならず、文化の一般的関心を表現するものでなければならない。つまり諸文化価値でなければならない。第三テーゼ：価値は無条件の普遍的妥当性が帰属せしめられるという意味で客観的でなければならない。第四テーゼ：歴史研究は、諸価値を理論的な仕方では歴史学的個体と関係づけなければならない。オックスによれば、リッカートは評価と価値関係の区別を明らかにしようとする際に、宗派的前提にもとづく宗教史研究の方法論的位相を念頭においている。例えば、ローマ＝カトリックとプロテスタントの見地から書かれたルターの伝記は、それぞれ競合する主観的評価と結合している。これに対し、歴史家がルターの個性を宗教的価値に関連づけて規定するだけで、諸価値の妥当性については自らの立場を明示しない場合、つまり価値関係にもとづいている場合、歴史学的認識の問題は解消され、客観性が保証されるとリッカートは考えるのである。しかし、二つの対立する価値判断が依拠する共通の価値関係と

¹⁵ Guy Oakes, “Max Weber und die Südwestdeutsche Schule: Der Begriff des historischen Individuums und seine Entstehung”, in Wolfgang J. Mommsen und Wolfgang Schwentker (Herg.), *Max Weber und seine Zeitgenossen*, Göttingen/Zürich: Vandenhoeck & Ruprecht, 1988, S. 607-609. ガイ・オックス「マックス・ヴェーバーと西南ドイツ学派：歴史的個体の概念とその発生」嘉目克彦訳、『マックス・ヴェーバーとその同時代人群像』鈴木広、米沢和彦、梶目克彦 [監訳]、ミネルヴァ書房、1994年、397-399頁。

いうものはありうるだろうか。むしろ共通の価値関係が価値判断上の同意を前提にしているのではないか。オークスは、評価は価値関係の可能性の条件であり、価値関係には価値判断が不可欠であるとして、リッカートの価値と評価の二分法と歴史学的個体の認識問題に関する解決策は崩壊していることを指摘する。佐藤俊樹の言葉を借りれば、価値関係は「対象を解明する視点であるとともに、解明された対象のあり方から見出される特性」¹⁶であり、循環論になっているのである。

価値哲学における目的論的方法¹⁷は、これから解明しようとするものをすでに前提してしまっており、自らの根拠を自分で見出すことはできない。ハイデガーは、循環的なあり方を「理論的につくり出された難点」(GA56/57, 95)として捉え、理論的なもの以前の「周囲世界体験」に立ち返る。前—理論的なものの解明においてハイデガーが重視したのがディルタイの研究であった。

3. 作用連関と「現在」

1920/21年冬学期講義『直観と表現の現象学』では、「絶対的妥当の問題(アプリアリ問題)」と「非合理的なものの問題(体験問題)」という二つの対立するテーマが扱われており、アプリアリ問題に関しては「歴史(Geschichte)」の意味が、体験問題に関してはナトルプとディルタイの立場が検討されている。ハイデガーは「歴史」を、(I)歴史科学、(II)客観的なもの(III)伝統、(IV)人生の教師、(V)所持(Haben):例「この人は悲しい歴史をもつ」、(VI)生起(Geschehen):例「私にとっても不愉快なこと(Geschichte)が起こった」、という6つの用法に分類する。(I)は理論的態度にもとづくあり方であり、(II)は「客観的な過去」として、特定の「歴史学的現在」から引き剥がされた生起を意味している。そして(III)は、保存しつつも絶えず新たに継承する仕方での自分の過去に関わるあり方を、(IV)は、自分の過去ではないが、そこから指導を受け取り、それによって自分の生が方向づけられていくあり方を示している。(III)および(IV)にも「もつ(所持)」という性格が見出されるが、(III)においては、自分の過去が共同性によって動機づけられているのに対して、(V)では、まさに自分自身の固有の過去が問題になっている。そして(VI)は、事象的生のあり方そのものである。ハイデガーはこれら6つの観点を「関連意味(Bezugssinn)」「遂行意味(Vollzugssinn)」「内実意味(Gehaltssinn)」という三つの意味方向から統一的に捉えようとした。

「関連」とは「接近(通路)関係(Zugangsbeziehung)」、つまり「接近様式(Weise des Zugangs)」であり、「関連」から「関連」へという関係は「遂行」のなかで所持されていく。この場合の「所持」とは、あるものを手に入れるという意味での対象関係や、意のままにできるという意味での態度的な関わりではなく、自分固有の過去へと結びつけられているあ

¹⁶ 佐藤俊樹『社会科学と因果分析：ヴェーバーの方法論から知の現在へ』岩波書店、2019年、61頁。

¹⁷ ただしリッカートは、自身の理論の問題点を指摘し、「目的論的」概念形成を避けている。渡邊『歴史の哲学』260-266頁参照。

り方である。「内実意味」は「関係意味」に即して「遂行意味」が働くことによって開かれる方向性であり、「事實的生の経験」はこれら三つの意味方向によって表されるのであるが、「遂行」の仕方によって「関連意味」とそれに対する「内実意味」という関係性だけが取り出される。このときの様式が理論的態度であり、事實的生から捨象されたあり方である。つまり、ハイデガーによれば「どの態度 (Einstellung) も一つの関連であるが、どの関連も態度であるというわけではない」(GA59, 64) ののである。

1919年の講義「哲学の理念と世界観問題」でハイデガーは、循環的あり方が認識論という理論的な見方にもとづいていることを指摘した後、体験についての学は可能かという問いを提起し、ナトルプの記述的反省の方法を取り上げていた (GA56/57, 99-106)。反省的なまなざしを振り向けることは、それまで見られていない体験を一つの見られた体験とすることを意味している。見られた体験とは客観であり、体験という主観的なものは客観化を通して再構成されることによってのみ与えられる。ハイデガーは1920年の講義「直観と表現の現象学」で、体験連関を一つの全体として捉えようとするという点でディルタイとナトルプに一致を見出す一方、両者が根源的に対立していることを指摘する。ナトルプにおいては構成関係の全体が問題であり、自我は関係の連関として構成の連関全体のなかで消失する。これに対し、ディルタイにおいては生の作用連関が問題であり、自我は作用連関の「原細胞 (Urzelle)」である (GA59, 164)。つまり、体験の全体が一つの作用連関であり、自我は環境との相互的な作用連関のなかに位置づけられている。マックリールは、ハイデガーが、体験の「内実意味」が「関連意味」に根づいているというナトルプの考えを採用しながらも、主観をたんなる形式的限界として捉えることは拒否し、ディルタイに立ち戻ることを指摘している¹⁸。「関連意味」と「内実意味」だけでは理論的態度に陥るのに対し、「遂行意味」の側面が加わることによって生の歴史的なあり方が開かれる。ハイデガーはディルタイの「作用連関」に「遂行意味」の性格を見出しているのである。

しかし他方で、ハイデガーは、生から世界全体を理解しようとするディルタイの試みにも「構成」の要素が忍び込んでいるという (GA59, 165)。「ディルタイの方法は生の連関における「構成」である。生においてまた生から外化されたものだけが理解される。つまり、生はその客観化 (Objektivierung) においてのみ近づきうる (zugänglich)」(GA59, 168)。ハイデガーは「歴史」の意味を6つの観点から考察していたが、(II) について説明している箇所「作用体系」や「客観態」という用語を使って、ディルタイが歴史を客観的に捉えていることを示唆している。『存在と時間』では、「歴史的把握の「認識論的」(ジンメル) 解明」や「歴史叙述の概念形成の論理学 (リッカート)」においてだけでなく、「対象面」へ定位している場合でさえも、歴史は学の「客観」としてのみ近づきうるにすぎないことが指摘されており (SZ, 375)、ここで暗にディルタイの立場が批判されている。

歴史を「客観」として捉えることへの指摘は、1920/21年の講義「宗教現象学入門」にも

¹⁸ Rudolf A. Makkreel, "Dilthey, Heidegger and the Actualizing-Sense of History", in John Rogove, Pietro D'Orlando (eds.), *Heidegger and his Anglo-American Reception: A Comprehensive Approach*, Switzerland: Springer, 2022, p. 224.

見出せる。そこでハイデガーは、「歴史的なもの (das Historische)」に対する立場として、(a) プラトンの道、(b) 歴史的なものに徹底して身を委ねる道 (シュペングラー)、(c) a と b 両極間の妥協の道の三つに分類し、(c) にディルタイ『精神科学序説』、ジンメル『歴史哲学の諸問題』、リッカート-ヴィンデルバントの歴史哲学全体を帰属させていた¹⁹ (GA60, 38)。(a)が絶対的規範を歴史的なものに対して高次の現実性で見なすのに対し、(b)は規範を断念し、歴史的なものに現実性を見る。そして(c)は、私たちは歴史の内にながら理念へ規範づけられていると考える立場である (GA60, 46)。ハイデガーは (a) (b) (c) すべてに共通する性格として、歴史的現実性を「客観的存在」として捉えていることと、「類型化」への傾向を見る。(a)は、歴史的なものを絶対的妥当の世界 (理念) として捉える立場であり、ヴィンデルバントの「個性記述的」という歴史に関わる方法概念やヴェーバーの「理念型」がこれに当てはまる。(b)のシュペングラーにおいては、根本現実性は形態学的概念であり、形態学的類型化は歴史認識のための本来的な手段と見なされている (GA60, 44-45)。そして(c)においては、「普遍史的な方向づけの助けを借りて将来を規定するために、現在をその類型において過去に対して鮮明に限界づけること」(GA60, 45)が重要であり、「現在」の位置づけにその特徴が見られる。

ハイデガーは「現在」をジンメルの哲学から説明する。ジンメルにとって「歴史は自由に形成する主観性の産物」であり、「いずれの歴史像も、形成する主観性からその構造を手に入れるため、歴史を見る一つの現在に依存している」(GA60, 41)。それでは、いかにして歴史像は歴史学的客観性に到達するのか。ジンメル自身はマイヤーに言及していないが、ハイデガーは「歴史学的なものとは影響あるものである」というマイヤーの規定を取り上げ、ジンメルの立場を次のようにまとめている。ジンメルにとって、諸々の出来事やそれらの影響の総和は歴史学的意義ではなく、歴史学的意義をもたらすものである。影響あるものとして諸々の出来事の総和が解釈されうるのは関心がある場合だけであり、そうした関心へ向けて影響は影響あるものとして見られるのである²⁰。

この講義ではリッカートやディルタイは「現在」との関係から取り上げられていないが、ハイデガーは「歴史科学における時間概念」で、選択の原理の問題をめぐってマイヤーが「現在」に依拠した歴史学的関心について述べている箇所を引用し、この関心をリッカートの「価値関係」から説明していた。またディルタイは、作用連関のなかでの位置をマイヤーのように「現在」を物差しにして考えるならば、意義があるものについての基準が必要であることを指摘し、「現在」において意義があると認めるものは「未来」や「未来における私の行為」や「未来へと向かう社会の進展に有効であるもの」であると述べている²¹。「現在」や

¹⁹ (c)の立場をディルタイとジンメルに言及して「生の哲学」として特徴づけたり、ヴィンデルバントやリッカートの立場を(a)の観点から説明したりしている箇所もある (GA60, 44, 49, 50)。

²⁰ Vgl. Georg Simmel, *Die Probleme der Geschichtsphilosophie*, 5. Aufl., München/Leipzig: Duncker & Humblot, 1923, S. 184-185, 191. 『ジンメル著作集』第1巻「歴史哲学の諸問題」生松敬三、亀尾利夫訳、白水社、2004年、218-219, 227頁

²¹ Dilthey, *Gesammelte Schriften VII*, S. 289. 『ディルタイ全集』第4巻、326頁。

「未来」は、ハイデガーの「歴史性」および「時間性」においてどのように位置づけられるだろうか。

4. 歴史学と歴史性

『存在と時間』では、歴史の通俗的理解として、「歴史学」という意味を除いた「歴史」の4つの語義が指摘されている (SZ, 378-379)。1. 「過ぎ去ったもの (das Vergangene)」として、「現在」への「影響」をもたないもの、もしくはその反対に「現在」へ「影響」を及ぼし続けるもの。2. 「過去からの由来」として、「過去」「現在」「未来」を貫通する出来事の連関、もしくは「作用連関」。3. 人間や人間的諸集団、「文化」や運命など、「時間の内で」変転する存在者全体。4. 伝承されてきたものそのもの。1では、「現在」との関わりにおいて「過去」に重点が置かれているのに対し、2においては、「過去」は特別な優位をもたず、「現在的」でありながら「未来」を規定するという性格を有している。強調点が異なるこれらの語義をハイデガーは統合して、「歴史」を「時間の内で起こる実存する現存在の特殊な生起」、しかも「共相互存在の内で「過ぎ去って」いながら同時に「伝承されていて」影響を及ぼし続けている生起」(SZ, 379)として捉えるのである。

この規定のなかで2の「作用連関」に呼応しているのが「生起」という表現であると考えられるが、この術語は、時間の内で諸体験が移り行くデルタイの「生の連関」に対し、誕生と死との間の「伸び広げられつつ自分を伸び広げる特殊な動性」(SZ, 375)を表すためにもち出されたものである。しかし、ハイデガーはたびたび括弧付きで「生の連関」や「連関」というデルタイの用語を自分の立場を説明する箇所を使っており、ハイデガーにとって問題は「生の連関」や「作用連関」それ自体ではなく、それらが時間の内での経過と見なされていることにある。リッカートにおいては「作用連関」というようなものはそもそも視野に入っていないのに対して、デルタイは私たち自身が歴史的存在であることを認識していた。だがデルタイは、歴史を扱う際に、自分自身が帰属している「作用連関」をすぐさま飛び越して「作用連関」を客観的に捉えている。ハイデガーはこのことを問題にするのである。

あらゆる学問は「主題化」(SZ, 363)を行っており、これによって前学問的に知られているものが、その領域を限界づけられ、「客観的」に問いかけられるようになる。では、歴史学における主題化とはどのようなものか。過去へと遡源するためには、十分な史料があるかどうかということは度外視して、そもそも過去へと至る道が開かれていなければならない (SZ, 393)。ここで池上俊一の『歴史学の作法』に戻ろう。池上は第2章「いかに歴史を叙述すべきか」で、史料の「読み」にも「書き」にも歴史家の主観=主体が必要であることを指摘した上で、「出来事は物語り行為²²の中で物語られることによって、はじめて歴史にな

マイヤーもまた「現在の出来事のなかで何が影響を及ぼすかは、つねに未来が、つまり現在のなものの未来での影響がはじめて教える」と述べている。Meyer, “Zur Theorie und Methodik der Geschichte”, S. 47. マイヤー／ヴェーバー『歴史は科学か』54頁。

²² 野家啓一『物語の哲学』岩波現代文庫、2005年。野家啓一『歴史を哲学する：7日間の集中講義』岩波書店、2016年。

る」²³と述べ、歴史叙述の固有の要件と特色について考えていく。歴史の対象は過ぎ去ってしまっていて、いま目の前にはない。それゆえ歴史学にとっては「史料」が不可欠であり、「史料」がないと「歴史」もない。いったん当事者や証人から離れて文字になったもの（史料）から、歴史家が再構成しなければならないのである²⁴。そしてそのためには「歴史家自身の体験や関心によって発せられる問い」²⁵が必要であり、歴史叙述以前の史料探索・検討段階で、すでに出来事の「物語化」が始まっている²⁶。

ハイデガーにとって、「過去」へ遡ることは「資料の入手、精査、確保」によってはじめて可能になるのではなく、それらは「歴史家の実存の歴史性」(SZ, 394)を前提としている。「歴史家自身の体験や関心」はハイデガーのいう「実存」にその根をもつ。歴史叙述はそれを行う者の「主観」に依拠せざるをえないが、ハイデガーは「主観」のあり方を問題にした。現存在は、つねに自らをある可能性へ向けて投げ入れており、そうしてある一定の可能性に方向づけられたありようからさらに新たな可能性へ向けて自らを投げ入れていくというあり方をしている。1920年の講義の表現では、「関連」から「関連」へという関係は「遂行」において「所持」され、動機づけられていく。そして動機づけられたありようから一定の傾向が生じ、またその傾向によって動機づけられていくというありようをしているのである。

こうした事象的生における生起としての「歴史」には他の人々「ともに」という性格が含まれている。つまり『存在と時間』の表現では、現存在の存在はつねに「共存在」であり、現存在はその時々々の公共的な「被解釈性」にもとづいて自らを理解している(SZ, 383)。「歴史家の体験や関心」もまたその時々々の被解釈性によって規定されているのである。それゆえ、歴史家が自らの先入見を顧みて、自らが主題とするものを隠蔽することなく理解へもたらそうとするならば、被解釈性にさらされたままであるのではなく、被解釈性に発しながらも抵抗し、そして被解釈性のために可能性をつかみ取ることが求められる。つまり、自らの「過去」から動機づけられるがままに「現在」に立つのではなく、「過去」として影響を及ぼしているものをいったん取り消し、自らに受け継がれてきたものを取り返すことが必要である。ハイデガーはこうしたあり方を「反復(Wiederholung)」と呼んだ。反復はかつて既在していた実存の可能性に応答することであり、「表明された伝承」(SZ, 385)である。

ハイデガーは、「過去」の歴史学的開示は反復にもとづいていること、そして歴史学的開示は「主観的」であるどころか、むしろ「反復」のみが「客観性」を保証すると述べる(SZ, 395)。それは、歴史学においてまさに「時間性」の構造そのものがあらわになっているからであり、そして歴史学ほど「本来性」を要求する学問はないからである。「歴史学は〔…〕「現在」の内に、また今日においてだけ「現実的なもの」のもとに、そこから過去となったものの方へ手探りつつ戻っていくために、その出発点をとるのではけっしてなく、歴史学的開示もまた将来から時間化するのである」(SZ, 395)。被解釈性そのものが固有の歴史をも

²³ 池上『歴史の作法』48頁。

²⁴ 池上『歴史の作法』48-49頁。

²⁵ 池上『歴史の作法』50頁

²⁶ 池上『歴史の作法』51頁。

っているがゆえに、歴史学は「伝承の歴史」を通り抜けてはじめて既在していたものに突き進んでいく (SZ, 395)。動機づけから生じる傾向の流れに身をまかせるのではなく、自分の方へ到来してくる傾向に眼差しを向けて自分自身の「既在性 (Gewesenheit)」を視野に入れること、このことを可能にするのが「将来」から発現する時間化である。デイルタイが述べている「未来」は「現在」や「過去」と同様に「作用連関」のなかに位置づけられるのに対し、「将来」はそもそも「作用連関」というようなものを生起させている源である。しかし、ある歴史家の歴史叙述に向かう姿勢が本来的歴史性に、したがって本来的時間性に根拠しているからといって、歴史家自身がその構造を理解している必要はない。「史料「だけ」しか編集しない歴史家の実存が、本来的歴史性によって規定されていることもありうる」(SZ, 396) のである。

おわりに

ハイデガーは『存在と時間』第 32 節「理解と解釈」で歴史学に言及している。「循環」を含んで成り立つ歴史学的解釈の仕事は、厳密さの劣った認識であると考えられた。自然認識と同じように、観察者の立場に依存しないような歴史学を創造するということが理想とされたのである。しかし「循環」のなかに誤りを見て、それを避けようとするのは、「理解」を根本的に誤解することである (SZ, 152-153)²⁷。池上もまた野家啓一を参照して²⁸、「歴史的出来事は歴史叙述に存在論的に先行するが、歴史叙述は歴史的出来事に認識論的に先行するという循環構造」があること、そしてそれが歴史認識を根底において特徴づけていることを指摘している²⁹。ハイデガーにとって、「循環」は私たちのあり方そのものの構造であって「時間性」にもとづいている。池上は『歴史学の作法』で「歴史叙述の特質」を語る前に人間が「時間内存在」であることに言及しているが³⁰、「時間の内に」というあり方によっては歴史学的認識にそなわる「循環」を捉えることはできない。こうした「循環」を考え抜いたのがハイデガーであり、ハイデガーの本来的歴史性の議論は他の学問分野には見られない「歴史学の特異性」を提示しているのである。

²⁷ 渡邊『歴史の哲学』349-350 頁。

²⁸ 野家『歴史を哲学する』37-54 頁。またこの点について渡邊『歴史の哲学』26-38 頁を参照。

²⁹ 池上『歴史の作法』65 頁。

³⁰ 池上『歴史の作法』58-62 頁。